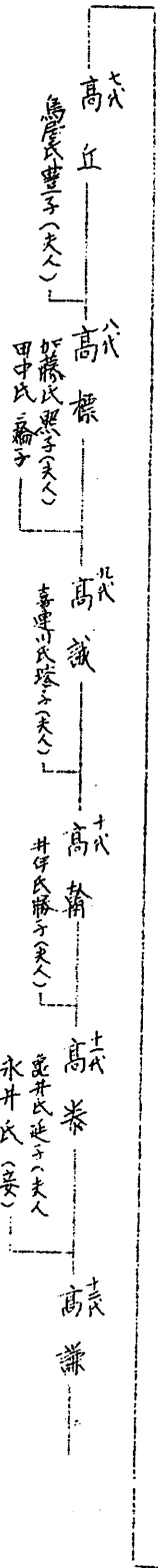
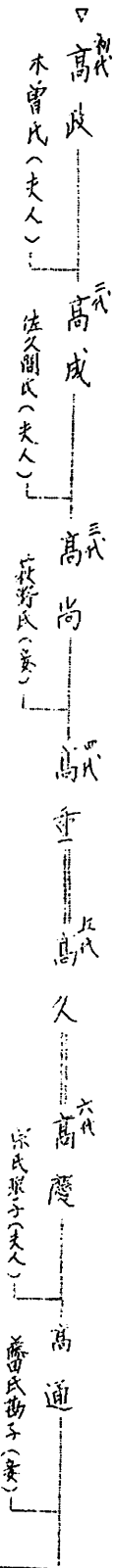


研究

毛利氏の女系について(二)

会員 佐 脇 賢 一



* 評もあるが、高慶一代の事績は彼が如何に秀れ友人に
 であつたかを示してあつたりあるものがある。家庭的には
 夫人宗氏と漢愛し、夫人使在るときは一人の側妾もおか
 ず、夫人病床に臥すにあつて、その勸め下従つて妾を
 置いた。夫人歿後はおえて正妻と娶ふず、寵妾は太田氏
 奥平氏、山下氏、藤原氏のほか五人を数えたが、その艶

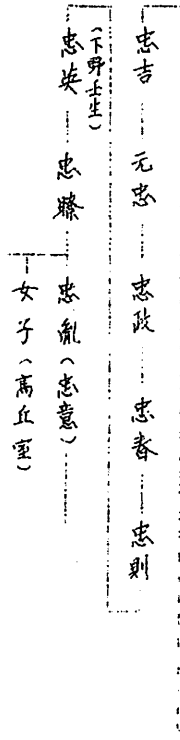
これは毛利氏歴代の女系を示したものである。前述し
 たように毛利氏は四代高重の子なく血統は絶えたが、御
 家存続を願う家老戸倉庸重、益田令治らゝ奔走で、豊後
 森藩一万二千五百石久留島信濃守通清の第三子親貞を迎
 えて養嗣子とした。これが五代高久であるが、高久才左
 麻弱で、夫婦生活に耐えず、夫人南郭氏を去りて独身生
 活を送つたため嗣子なく、同母弟助十郎と養つて後嗣と
 した。助十郎すなわち六代高慶(初名高定)後高寛と改め
 まる高慶と改玉)は歴代中の豪傑で、佐伯藩中興の業主
 といつてよい。弛緩状態にあつた藩政を刷新し、文武兩
 道と鼓吹して治績をおげた。藩主たること四十三年、刑
 政嚴格であつたため、性苛酷な人物ではなかつたかとい

△ 宅に溺れず、一板に嫡庶を別を明らした。かつて世
 子君の時代、奥小姓として將軍綱吉に仕え、典礼にわ
 しかつたため、登壇した嗣子高道が急疾によつて浅世し
 たことを恥じ、これを隠居させて山下氏所生の庶子大八
 郎と嗣子とした。しかし山下氏の寵遇をめぐり、よから
 ぬ噂が藩内にひろがる也、山下氏を幽屏して噂の根元と
 絶た、嗣子高能(大八郎)の病死によつて、高道の子
 徳高(寅太郎)を後嗣とした。
 高慶におこる中興毛利氏は、正妻宗氏の生んだ高道の
 長子寅太郎徳高が継いだ。徳高は後の岡防守高丘である
 か、生母は高道寵愛の妾藤田氏勘子の方、お徒士藤田某
 の養女であつた。七代高丘は下野壬生三万石馬居伊賀守

(参)

忠胤の妹重子と夫人とした。この腹に旁三郎（高標）岩三郎（秋田季礼）の二子が生れた。高丘は以外に三人の弟がおり、佐原氏（貞齋院）繼田氏、雪子といひ、それ外に女子を生んだが、佐原氏は夫人鳥居氏を娶る前からの側女だったように、慶長子土之助は花房因幡守正域の養子となつた。なお高丘の母藤田氏の墓は、養賢寺毛利家墓所にある。（慈慶院殿椿操貞壽大師、宝曆十三年四月九日歿）。まゝ高丘夫人鳥居の墓も同所にある。（清光院殿慈光妙監大師、寛政十二年十月八日歿）。同夫人の生家である鳥居氏は關ヶ原の役にたゝし、伏見城を死守して討死した鳥居元忠の後、出羽山形二十一万石を領し古忠政の次男忠春に出ている。

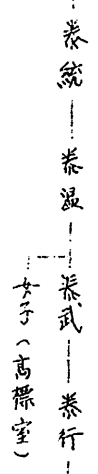
▽（本姓徳積 鈴木重高の後）鳥居法眼重氏 忠氏



八代は高標、佐伯文庫で知られる寛龍公である。幼名は考三郎、初は高代、後高殿、まゝに高標と改めた。夫人は伊豫大洲六万石如蘇遠江守泰武の外照子であつたが生んだのは女子ばかりでいづれも夭逝したので、栗田中氏三輪子生おとミスの岩之助を嗣子とした。高標は田中中氏のほかに養子、道子の二妾がある。打取高標夫人加藤氏の墓は養賢寺にある。（清照院殿心月慈鏡大姉、享和二年八月二十四日歿）。加藤氏は豊太閤の家士加藤光兼の後で、光泰は天正十八年小田原役後、可斐二十四万石に封せられたが、関ヶ原戦へハ古豊臣敏故によつて伊

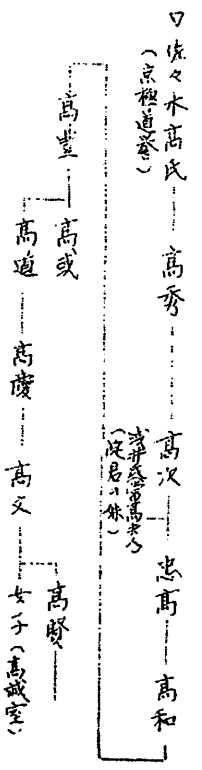
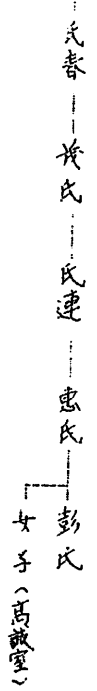
豫大洲六万石に移封された。

▽加藤光泰 貞泰 泰興 恭義 泰恒



九代高誠は寛政四年十一月、才女宛代の子として高殿と名乗つていたとき、下野喜連川領主で、高家兼筆頭喜連川左兵衛督彰氏の妹盛子と夫人とした。寛政九年正月夫人は第二子千鶴を生んだが、産後の日立七わらく二十六月病歿した。（梅叢院殿花葉妙登大姉）。文化元年七月、讃岐多度津藩上京強老政守高殿の妹里歌子と後妻とした。（宝草院殿安藤靈綱大姉、文政七年三月四日歿）。前夫人喜連川氏は深菊（高翰）千鶴の二子を生み、後夫人京極氏は故之助を生んだ。ほかに京市口氏がおり、冬松、茂松の二子を生んでいる。前夫人の生家である喜連川氏は古河公成氏の子辰利政氏の後、高家筆頭の名門である。

▽辰利政氏 高基 (三代盛) 兼説 尊信 昭氏



十代高翰正夫人喜連川氏の所生である。高翰夫人は越後其板藩主井伊古宗大夫直朝の女孺子、文化九年九月結婚した。井伊氏には一男二女があり、男室之助が世子となつた。高翰正は夫人のほかに葉茂子、佐伊子、然子、乙治子の四人の妾があり、いずれも子女を生んだが、當時、藩侯としては常識的な行爲をなす。四妾は佐伯城内に仕えた側室であつたようで、このうち直見村から召した夫人女子（吉田氏と伝う）があつたという。夫人井伊氏は、徳川家譜代房根井伊家の支藩、越後其板藩主井伊直朝（なおあき）の女である。（貞松院殿齋妙蓮大姉、天保十五年六月晦日歿）。

▽井伊直親——直政（正明齋歌）——直勝（貞松院殿齋妙蓮大姉）——直孝（其板藩）——直陽

直貞——直存——直郎——女子（高翰室）

十一代高恭夫人は石見津和野藩主豊井大陽守茲尚の女孺子、夫人は吟子、稚子の二女を生んだがいずれも夭折した。夫人は吟子、稚子の二女を生んだがいずれも夭折した。正明齋歌に「妻永井氏が天保十一年二月、男子除二郎（高謙）を生んだ。正明齋歌に妻花子があり、勝三郎、秀子の一男一女を生んだが、これと天保した。嘉永二年九月妻永井氏は致仕して生れ故郷京都へ帰つた。佐伯藩は同女に終世三人扶持を送つた。夫人豊井氏は豊水閣に仕えて南方経略を献策した豊井茲矩（通称新十郎、遊藝で尺楯の新十郎といわれる豪傑、秀吉は茲矩を琉球守とよんだ。）の裔系にある。

▽豊井重清（十代孫）——茲矩——政矩——茲政——茲親

茲尚——茲延——茲胤——矩貞——矩賢
女子（高恭室）

夫人豊井氏は安政六年十二月二十二日歿した。墓碑は養賢寺墓地にある。（春信院殿梅程妙蓮大姉）

十二代高謙の生母は永井氏。その夫人は対馬十方石宗辨馬守義和の妹定子であつたが、同夫人は文久元年七月病歿した。（清蓮院殿齋香遠大姉）。明治三年高謙は伯母満子の嫁いだ肥後守土藩主細川行塔の子立則の長女美女子と後妻に迎えた。この夫人にも子女なく、夫人の弟行真の子侃次郎と養嗣子とした。十三代高謙子爵である。

以上毛利氏系図を中心にして毛利氏の女系について記述したが、その結果徳川幕府の統制下に藩封を維持し、社稷を保つことが各封建諸侯にとっていかに難かしく、いかにあつたかを知る事が出来た。

慶長六年四月、毛利高政が佐伯に入部してから、明治四年八月毛利高謙が佐伯を引揚げて東京に居住するまで約二百七十年間の佐伯の歴史は、いわば毛利氏の行政史であり、毛利氏のあり方を研究する以外にはこの間の歴史を明らかにする方法はない。毛利氏の女系について調べてみると、資料が少なく思うようにいかないのは残念である。

（筆者住所：佐伯市下堅田字津志河点）（終）